

## 私の学生時代

看護福祉学部  
看護学科

教授 濱田 淳一



憧れの北海道の地に足を踏み入れたのは、18歳の春でした。ちょうど日本の漁業が獲る漁業から作る漁業へと転換する時期で、水産学って面白そうと思い、北大に入学しました。札幌キャンパスで過ごした教養課程は我が世の春でしたね。下宿やクラスの友人と遊び呆けて、気が向いたら勉強とバイトという生活で、これまでの人生の中で最もストレスのない1年半



北大入学当時、札幌キャンパスでのクラスの仲間と。左から3人目の立っているのが私です。

でした。また、生まれて初めて蝦夷地の四季を身近に感じることができ感動の連続でした。特に、梅も桜もツツジも一緒に咲き誇る春と夜のしじまに舞う雪の美しさには圧倒されましたね。

函館の水産学部への移行と同時に、心機一転、体たらくな生活におさらばしました。大学の周りに遊ぶところがなかったのも理由の一つですが…。午前は座学、午後から実験、夕方はフェンシングで汗を流すという毎日でした。毛の一本一本まで詳細に描いた毛ガニのスケッチや顕微鏡下でのプランクトンの解剖などは懐かしい思い出ですね。実習も多くて、七飯や洞爺湖、白尻の大学の施設を始め、道内外の水試やふ化場に足を運び鍛えられました。また、僅か1週間ですが乗船実習も経験しました。しかし、これは地獄でしたね。ただでさえ船酔いしているのに、滴定法で海水の溶存酸素を測定するのですよ。吐き気との戦いでしたね。最



乗船実習、おしよ丸の甲板上。一番前の真ん中で蹲踞の姿勢が私です。

終学年は、自分の卒論はそっちのけで教室の院生の実験補助に明け暮れました。昼夜を問わずサンプリングやラボでの実験に邁進する先輩諸氏の姿が、自分には嬉々として遊んでいるように映りました。これが「研究の道に入る動機の一つになりました。ただ、水産学ではなく、北大の獣医学研究科(修士)、医学研究科(博士)と進み、現在の専門である腫瘍学の世界に身を置くこととなりました。そのきっかけは、学部時代に腫瘍をもったカレイに出会い、生意

気にも摩訶不思議ながんの正体を解き明かしたいと思ったからです。改めて大学の4年間での人や生き物との出会いがなければ今の自分はないなと思います。

# 私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は濱田淳一教授と杉原佳奈専任教員のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

## 私の学生時代

歯科衛生士専門学校

専任教員 杉原 佳奈



私は本学の歯科衛生士専門学校(当時は2年制)を卒業後、看護福祉学部へ、さらに大学院へと同期よりも長い学生生活を過ごした。実は元々は歯科衛生士ではない医療職をめざしていたが、学力が足りず失敗。かといって浪人する経済的余裕もなく、どうしようかと思った時にふと目に留まったのが歯科衛生士専門学校だった。2年で資格を取れるという安易な考えだけで何となく入学してしまったため、入学後もなかなかモチベーションが上がらず、ほんやりとした日々を送っていた。

そんな時、ある授業の中で、障がいを持っている方々が勉強する際のサポートをするボランティア活動があると知った。以前に同様のボランティア経験があったので、「これなら私にもできるかもしれない」と、学生便覧に載っている学内地図を見ながら、勇気を出して一人で看護福祉学部の研究室を尋ねたことを今でも覚えている。何をしても良いかわからない毎日だったので、何か自分の殻を破るきっかけとなる突破口を模索していたのだろう。また、当時の専門学

校の先生がとても熱心で、提出したレポートに必ず丁寧にコメントを入れてくださったり、よく声を掛けてくださった。幼少期から目立たない存在で、人からあまり褒められたことがない私にとっては、小さなことでも頑張りに見て認めてくれる人がいることがとても嬉しかった。「歯科衛生士=歯科医院で働く」というイメージしかなかったが、教育という仕事があることを知り、自分も学生の背中を押してあげられるような教員になりたいといつしか将来の夢を抱くようになった。そういったことが重なり、当初は専門学校の2年間で社会人となるはずが、両親に無理を言って看護福祉学部への更なる進学を許してもらった。

大学では編入生だったため、自分の足りない単位を修得するために毎日朝から夕方まで色々な学年に混ざりながら受講し、両親になるべく迷惑を掛けないように夜はアルバイトを掛け持ちし、合間に課題をこなす忙しい日々だった。大学3年生でゼミを選択することになり、私は石川秀也教授(前臨床福祉学科長)のゼミを志望した。色々な学年を渡り歩いて放浪(?)していた私にとって、ゼミはようやく自分の居場所が見つかったような気がした。10名のゼミ仲間と先生と、沢山学び、沢山語り、沢山飲み、人生で一番濃密な時間を過ごした。石川先生はいつも「お前

たちのことを親友だと思っている」と言って私たちのことを信頼して応援してくれた。卒業から10年以上たった今でも、毎年2回(キャンプや忘年会等)で先生を囲み、語りあっている。

仕事で行き詰まった時、結婚する時、子供が生まれた時等、人生の色々な局面において私たちは尊敬する恩師であり、親友でもある石川先生に報告をしている。今はそれぞれ環境は異なるが、久しぶりに会うと一瞬で大学時代のあの毎日に戻ったような気がする。かけがえのない仲間をこの先も大切にしていきたい。

長い学生生活の中で私が得た一番の財産は「人との出会い」である。授業やアルバイト、学外実習、ゼミを通して色々な年代の沢山の方々と接することで、自然とコミュニケーション力が上がり、緊張せずに人前で話せるようになったからこそ今の自分があるのだと心から感謝している。恩師が私にしてくれたように、学生が迷ったり困った時には寄り添い、力になれる存在になりたい。



石川ゼミでの夏合宿。豊浦町の特別養護老人ホームを訪問し、勉強させていただきました。右下が私です。